

アヘン戦争前後の東アジア国際関係と琉球

真栄平 房昭

1 東アジア情勢と琉球

十九世紀半ば、欧米列強による軍事的外圧を受けて、東アジア諸国が「開国」を迫られた時代、中国ではアヘン戦争を契機とする「五港通商」の開始、さらには太平天国の戦乱、第二次アヘン戦争（一八五六～六〇年）という未曾有の歴史を経験した。

このような時代の転換期にあたる一八四〇～五〇年代の中国情勢をふまえて、本報告ではアヘン戦争前後の国際関係の中で、とくに琉球ルートを通じた海外情報の伝播という問題を取りあげ、その歴史的状況について明らかにしたい。

(1) 中国―琉球―日本を經由したアヘン戦争情報

アヘン戦争に関する海外情報が日本の対外政策に重大なインパクトを与えたことはよく知られている。その衝撃

は、個別の「藩」を越えた日本全体の「国家」レベルの危機意識を生んだのである。

ところで、近世日本の海外情報源としては、長崎来航の中国船から入手した唐風説書とオランダ船の和蘭風説書の二つが有名である。しかし、琉球の朝貢使節がもたらしたアヘン戦争情報の存在については、これまで知られておらず、その実態は未だ解明されていない点が多い。そこで、琉球ルートの海外情報に関する未刊史料を紹介し、その具体的内容や事実関係について考察してみたい。

琉球は中国の「冊封体制」に組み込まれる一方、日本の幕藩制国家の支配下において長崎・対馬・松前とともに「四つの口」⁽¹⁾と呼ばれる対外関係の一環を構成する形で、日中両国と往来するマージナルな性格を持つ境界的位置にあった。

こうした琉球の特異な位置から生まれた「境界性」は、東アジア地域間の情報交流という視点から見ると、きわめて重要な役割を果たした。たとえば、明清交替・三藩の乱・アヘン戦争・太平天国の乱など、中国の軍事紛争にかかわる多くの海外情報が、琉球ルートを通じて日本へもたらされたのである。⁽²⁾

アヘン戦争後の開港から太平天国の乱にいたる中国社会の激動を、同時代の日本や琉球における中国認識と重ね合わせてみると、どのような歴史像が浮かび上がるのであろうか。

以下の論述では、十九世紀後半の中国情勢の変動に焦点をあてながら、琉球ルートの海外情報について具体的に検証してみたい。

アヘン戦争の情報

琉球ルートの情報入手経路をたどっていくと、福州の琉球館がきわめて重要な役割を果たしていたことがわかる。進貢使の宿舎にあてられた琉球館（柔遠駅）には、中国側との外交折衝にあたる存留通事（通訳）をはじめ、琉球の役人や留学生たちが滞在していた。また中国商人や福建の地方役人なども琉球館に出入りした。

そのなかでも、「河口通事」とよばれた中国人通訳グループは、とりわけ琉球人との接触が緊密で、中国当局とのさまざまな折衝の仲介役として重要な役割を果たした。

こうした「河口通事」との人的ネットワークを通じて、福州琉球館にはさまざまな中国情報もたらされ、一種の情報収集センターとしての性格を備えていたのである。

これらの中国情報は、福州から帰国した琉球人を通じて薩摩藩の耳にも入った。その具体例として、「琉球館より申出候書付」という史料が島津家文書の中にある。これは鹿児島の琉球館聞役が「唐帰帆之者」（福州より帰国した琉球人）から中国事情について聴取した「唐風聞之次第」（一八四〇年八月）をまとめた文書である。その内容をみると、琉球人がアヘン戦争（一八四〇〜四二年）の具体的な戦況について、かなり詳しく知っていたことがわかる。

一八四〇年二月、広州でイギリス商人の密輸アヘンが廃棄されたことを口実に、イギリス政府は中国への出兵を決定した。同年六月、シンガポールから北上したイギリス艦隊は浙江沖に集結し、長江河口に近い舟山列島を占領し、乍浦などの沿岸港市を攻撃した。こうしたアヘン戦争の状況について、琉球ルートの情報は次のように伝えている。

「六月初め、阿蘭陀船四、五十艘」（イギリス艦隊）が浙江省定海県に到着し、大砲をもって清の総兵官兵らを

殺害した。同月末には乍浦に攻め寄せたが、清軍の反撃によって七月中旬に撤退し、各地で「石火矢・鉄砲を打、合戦」が起こった。また福建の厦門にもイギリス軍が攻め寄せたが、「官軍に打ち負け引退」したこと、戦乱のため広東・浙江方面の海陸交通に支障が生じ、商人たちが迷惑しているといった状況である、云々と。

これまでの研究史では、長崎ルートから日本へ伝わったアヘン戦争情報だけが問題にされてきた。しかしながら、その情報は琉球ルートから薩摩へも確実に届いていたのである。薩摩藩主島津斉彬は豊富な海外知識をもち、世界情勢を敏感に察知した「開明派」の大名として有名である。かれを「開明派」にした情報源はいったい何であつたのだろうか。現在残されている島津斉彬の書簡類を検討してみると、長崎へ入港する中国・オランダ船のもたらす海外情報（唐・和蘭風説書）などを入手し、一方で琉球ルートからも多くの海外情報を積極的に収集し、それらを江戸幕府の上層部にも伝えていたことがわかる。

(2) アヘン戦争後の東アジア

アヘン戦争による清の敗北は日本に大きな衝撃を与え、それを契機に西洋列強に対する「視座の変革」が生まれた。さらに、イギリス艦隊が近く日本へ来航するという情報も伝わって危機感をつのらせた幕府は、「鎖国」体制の維持に不安を抱くようになった。³⁾

外圧に加えて国内では農民一揆の頻発など政情不安に悩まされた幕府は、「清の覆轍」を踏むことを強く怖れていた。すなわち、太平天国のように大規模な反体制運動が日本国内でも起こり、内憂外患によって幕藩制国家の基盤が大きく揺らぐことを警戒したのである。

アヘン戦争に敗れた中国はイギリスの要求に応じて、上海・寧波・福州・厦門・広州の開港を余儀なくされた。その際、琉球の貿易拠点であった福州も開港場となり、一八四四年五月には福州城外の南台に英国領事が駐留することになった。⁽⁴⁾ 薩摩藩は南京条約の写を含む海外情報を琉球ルートから入手し、イギリスの動きを察知することができた。アヘン戦争情報なども薩摩に報告され、中国情勢の変化を知る重要な資料となった。

一八四五年、イギリス領事オールコック（後の初代駐日公使）が福州に着任、開港後の通商体制を整える一方、英国領事館では宣教師ベッテルハイムを介して琉球現地の情報を集めた。同年、イギリスの探査船サマラング号が琉球に再来し、さらに長崎を経て濟州島まで測量航海をおこなった。日本列島の北ではロシアが蝦夷地をうかがい、南では英・仏・米の列強が琉球に接近していた。こうした動きに対し、幕末知識人の間に強い危機感が生まれた。

「蝦夷、琉球奪はれなんには、とても日本とても保つべからざるに至りなん」（『壬子防海新策』）というように、これら南北の境域が外国に侵されると、日本の存立さえも危うくなるとの認識が深まったのである。

東アジア地域で「砲艦外交」(Gunboat Diplomacy)を展開する欧米列強は、日本開国の足がかりとして琉球に注目した。一八四四年に來航したフランス極東艦隊は、琉球王府の強い反対を押し切って、宣教師フォルカードらを現地に残留させた。⁽⁵⁾ フランスの交易要求については、やむなく琉球に限るという条件付で幕府はこれを黙認したが、その譲歩は日本開国に道をひらく一つの重要な契機となった。すなわち、ペリー艦隊來航に先立つこと約一〇年、フランス人宣教師の琉球滞在は、幕府の「鎖国」政策が及ぶ地にヨーロッパ人の居住を認めた最初の例であった。それは、カトリック布教再開の端緒であったのみならず、「鎖国」体制そのものを突き崩す突破口の一つとなつたのである。

ところで、外圧Ⅱ「西洋の衝撃」を単純に「近代」開幕の契機とみる従来の歴史認識が批判され、近年の中国史研究ではアジア域内における交易ネットワークの展開、開港場と地域市場圏の関係など、新たな視点に立つて問題が解明されつつある。⁽⁶⁾ 東アジアの中で琉球をめぐる西洋列強の動きに注目すると、琉球王府は「仏英情状」⁽⁷⁾という形で中国側に情報を送って支援を求めたが、清朝は有効な対応をなしえなかった。これは、伝統的な冊封・朝貢体制の衰退を示している。一八五〇年八月、イギリス軍艦レナード号が通商と布教を求めて琉球に來航し、外務大臣パーマストンの書翰を突きつけた。この外圧に対し、琉球王府は次のような論理で抵抗した。すなわち、琉球は産物に乏しいため中国・トカラ（薩摩）以外の国と交易をおこなう余裕がないとしてイギリスの通商要求を拒否し、さらに「孔孟の教」を国是とする立場からキリスト教は容認できないという苦肉の論理であった。つまり、オランダ以外のヨーロッパ諸国との通商を禁じた「鎖国」の論理を貫きつつ、西洋のキリスト教に東洋の儒教主義を対置することによって、外圧の回避をはかろうとしたのである。

2 太平天国の戦乱

(1) 太平天国とペリーの視点

一八五一（咸豊元）年、広西省で勃発した太平天国の内乱は、たちまち各地に燃え拡がり、清朝の土台を揺るがす民衆運動へと発展していった。指導者の洪秀全は「大同の世」（自由・平等な世界）を作ろうと呼びかけ、五三年一月には長江中流の南岸に位置する湖北省の武昌を攻略した。

武昌は北岸の漢口とともに武漢三鎮と呼ばれ、「武漢を制する者は中国を制す」という有名なことばがあるように、後の辛亥革命も武昌で起こった。太平軍は武昌から一気に長江を下り、二月一八日江西省の九江、同二四日には安慶を攻略し、さらに五十余万の大軍が長江流域の大都市南京に迫った。清軍との激しい攻防の末、三月二〇日(旧暦二月一日)、ついに南京は太平軍の手に陥ち、天京と名を改めた南京は太平天国の首都と定められた。長江以南の地域をおさえた太平軍は、清朝と対峙する巨大な勢力に成長していったのである。

その頃、ペリー艦隊が日本の開国をめざす途中で上海へ寄港した。ペリー来航の予告情報はすでに幕府の耳に入り、その情報交換を通じて老中阿部正弘と雄藩大名との結末がより強固なものとなった。ここで注目したいのは、太平天国の乱にゆれ動く中国情勢にペリーが大きな関心を寄せ、次のような興味深い感想を日記に書き残している事実である。

現在の中国の政治情勢は、甚だ不安定である。帝国全体がある強力な革命を予言する煽動状態にあるらしい。

この国の半分は、遠い昔、現在支配しているタタール人の王朝によって奪われた古来の中国人を代表すると主張する反乱勢力「太平天国」によって占拠されている。

ペリーはさらに続けて、「これらの国内の動揺は、東洋諸国の情勢にある大きな変化が起るほんの発端にすぎず、(中略)ある強力な革命を予示するものだ、というふう⁽⁸⁾に推測しても突飛な議論ではない」と述べ、キリスト教の影響を受けた太平天国の内乱が、「全能の神の御手によって予定され、かつ指導されていることは疑いない」と確信した。また、「日本の運命それ自体は、かくも多くの、目を見張るような事件が一時に起っていることから予見されるし、破局はなおしばらくは遅れるかも知れないが、結果は必ず破局に至ることは確かである」と、日本の運命

もいずれば中国と同じく「破局」に至ると考えた。⁽⁹⁾

太平天国の実態については、「タタール人の王朝（清）によって奪われた古来の中国人を代表すると主張する反乱勢力」とペリーが理解したように、それはまさしく満州族の支配に対する漢民族の反乱であり、清の打倒と明の復興をスローガンに掲げた「明清交替の逆転劇」としての一面をもっていた。さらにキリスト教の影響を受けた一面をもつこの民衆運動は、中国に「革命」的変化をもたらすであろう、とペリーは予感した。

太平天国の動きを早くから察知していた首席通訳官 S. W. ウィリアムズも同様の認識に立ち、一八五三年五月一四日、上海から琉球へ向かうサラトガ艦上において、「中国が新時代の夜明けを迎えつつあることはたしかだ」と断言した。七月一四日、ペリーらは浦賀奉行戸田伊豆守らとの会見で太平天国の「革命」について言及したが、奉行はその話題にふれることを慎重に避けた。会見に同席したウィリアムズは日本の将来を展望しつつ、「今や日本にも訪れる可能性がある重大なる変化の前兆として、これは真剣に考えなければならないことかもしれない」と思案していた。⁽¹⁰⁾

このように日本社会に新たな変革が訪れる「重大なる変化の前兆」として、太平天国の内乱が認識された事実は注目に値する。なお、アメリカ人が日本社会の革命的変化に期待を寄せた背景には、開国交渉を有利に進めたいという外交的な思惑が見え隠れする。

(2) 琉球進貢使と戦乱の影響

東アジア史の視点からみると、太平天国をめぐる中国情勢はどのように認識されたのであろうか。この点につい

て、琉球使節の現地体験にもとづく海外情報を具体的に検討してみたい。

一八五二年秋、琉球の進貢使譜久村親雲上、正議大夫瑞慶覧親雲上らが北京をめざして那覇を出発した。一二月には太平軍が漢口を占領、緊張が高まっていた時期である。翌年正月、進貢使たちは北京での朝貢を終えて福州へ戻る途中、兵乱の影響で旅程を変更せざるを得なかった。五三年春ごろまで福建省北部の建寧府に滞留を余儀なくされた一行は、やむなく山岳地帯の脇道に迂回し、各自の携帯品は建寧府に預け置き、ひとまず皇帝の頒賜品だけを福州へ持ち帰ることにした。五月一〇日建寧府を小舟で出発した一行は、二八日なんとか福州にたどり着いた。そこで兵乱が鎮静化するのを待ち、「伴送官」(護送兵)を建寧府へ送り、先に預けた荷物をようやく回収した。まさに命からがらの危険な「唐旅」であった。

太平天国の兵乱の影響で進貢使らの帰国は大幅に遅れた。一八五三(咸豊三)年六月一五日に帰国した請諭使馬克承(小祿親方良泰)らの報告によれば、「今、逆賊乱をなし、各省の官軍はまさに力を合わせて攻勦するの間に在り。去年遣わす所の貢使は、また道を阻まれて通じ難く、建寧府に留滞して未だ館に回らず」という状況であった。進貢使の安否を気づかい不安をつのらせた琉球王府は、「安否伺之咨文」を一八五三年秋の接貢船に託した。しかし、この種の咨文は前例がなく不都合な事態を招きかねない、という河口通事の意見で福建布政司への咨文提出は中止された。⁽¹²⁾ 琉球国王は事態を憂慮し、王子や三司官に命じて弁才天堂・弁嶽・観音堂などで「逆賊」の鎮定を祈願させた。⁽¹³⁾ このように中国の兵乱が琉球に暗い影を落とすなかで、王府首脳は神頼みで不安を鎮めようとしたのである。

一八五三年五月、太平軍の動きに呼応して福建天地会(雙刀会)が海澄県で蜂起し、漳州・長泰・同安・厦門等

の地域を占領し、六月には台湾天地会も叛旗をひるがえした。⁽¹⁴⁾「唐国兵乱」はさらに混乱の度を深め、横行する「海賊」が官民を襲うといった生々しい現地情報が琉球ルートで伝わった。かかる中国の政情不穏は幕藩領主にも大きな不安を与えた。佐土原藩主島津忠寛は幕府に海防の強化を訴えた嘉永六（一八五三）年八月一五日の上申書で、
 「既に近比風説承候得者、今清国も大乱に及候由、さすれば何時其余波日本に及候義難計候」と述べるなど、清国の内乱が日本へ波及することへの不安を表明している。同年九月二九日、島津斉彬から幕府の奥医師多紀元堅に宛てた書翰⁽¹⁶⁾によれば、

唐国其後不相分、乍然中々可治光景無之由に御座候、當秋渡唐之琉人甚恐怖之由に承候、唐葉差支之事と存候、とあり、兵乱は終息する気配がなく、渡航予定の琉球人たちは「恐怖」を感じているという。実際、同年秋に出帆した琉球接貢船は「海賊」に襲われ積荷などを奪われた。⁽¹⁷⁾翌一八五四年、太平軍の攻勢はますます強まり、浙江省寧波にも戦火が及んだ。そのため、長崎に例年来航する唐船は姿を見せず、日中貿易にとって深刻な事態となった。長崎オランダ商館長クルチウスは、次のように述べている。

寧波から一月に渡来する慣例の唐船がまだ到着しない。日本人はもうすでに諦めている。ロシア人は中国の内乱が激化すれば、中国からの渡航が難しくなると予告していた。長崎住民にとっては大きな痛手である。⁽¹⁸⁾

このように、中国兵乱は長崎にとって対岸の火事どころではなく、深刻な経済的打撃を与えたのである。同年六月四日、琉球の三司官池城親方らは薩摩の新納太郎左衛門に次のような情報を送った。

広西より差起候賊兵漸々盛ニ相成、去年三月比には南京等被奪取、官兵数万を以テ防方被申付候得共、賊兵勢ひ強ク于今勝敗相分不申、右組合之餘賊方々へ攻掛、去年三・四月以来、湖北省・湖南省・江南省・山東省・

直隸省之内にも被奪取候州県及過分、其外所々盜賊蜂起にて官役・商人・旅客等を劫し候付、是又官兵を以折角制方被申付候由、福建省所々へ為差起賊兵共は撫院被差越被打平候由、

この情報によれば、広西に蜂起した太平天国軍は「去年」¹⁸⁵³年三月に南京を奪取し、翌年春には戦火が湖北・湖南など各省に拡がっていた状況が知られる。さらに一八五四年六月二日付の池城親方らの書翰によれば、太平軍は南京攻略後ますます勢いづき、五三年冬から翌年にかけて湖北・湖南・江南・山東省で二、三州の地域が占領され、直隸省天津も太平軍に包囲されたという。また、各地で「盜賊」が横行して役人や旅客を襲い、五三年四月以来、福建でも「賊兵」が蜂起したこと。同年八月には撫院の命令で官軍が賊軍平定に向かったが、「賊首」を取り逃がし、現在も賊兵たちが集まり騒ぎを起している、といった具体的な現地情報が伝えられた。¹⁹⁾

続いて一八五六年六月、次のような兵乱情報が琉球ルートから薩摩藩のもとへ届いた。同年正月、「長髮族共数千人」が武昌に攻め入って米穀・財物を奪い、婦女子を襲って人家を焼き払った。そのため福建省の建寧府へ逃れた二千人余の難民たちは「乞食」同然の悲惨なありさまとなった。こうした難民の群れに「賊」が紛れ込むのを怖れた福建総督は、彼らに食糧を与えて送還し、賊の探索につとめている、等々。²⁰⁾

中国の幹線動脈である運河交通網は戦乱のため各地で混乱し、北京に通じるルートも寸断された。大運河と長江が合流する要地・鎮江も太平軍に占拠され、琉球の朝貢ルートは危険にさらされた。そのため一八五四（咸豊四）年の進貢使向邦棟・毛克進らの「上京」は許されず、翌年八月まで福州琉球館に滞留を余儀なくされた。一八五六年の進貢使向有恒らの上京日程も「賊匪」の妨害のため大幅に遅れ、北京に到着したのはようやく翌五七年三月であった。

(3) 海外情報の収集と薩摩藩

海外情報の公開は、開国をめぐる政策論議を活発にし、政局の合意形成を促す上で重要な契機となった。相互の情報交換によって親密な関係をもつ開国派大名のなかでも情報収集に熱心であった島津斉彬は、長崎のほかに琉球ルートから独自の海外情報を入手した。それらを徳川斉昭、松平慶永、伊達宗城など一橋派大名や老中阿部正弘、前関白近衛忠熙らに知らせた斉彬は、幕府―大名―朝廷筋の人脈を情報でとり結ぶ、いわば「情報交差点」として重要な役割を果たしたのである。

ペリー来航を契機に、幕府に対して海外情報の公開を求める声は日ましに高まった。島津斉彬は嘉永六年七月一日付の徳川斉昭宛書翰で、かかる事態においては情報を秘匿せず、広く諸大名に知らせて意見を求めるようにすれば、人心の結束に役立つであろうと提言した。斉彬は琉球の情報ルートを利用して太平天国の動きをつかむと、水戸の徳川斉昭や京都の近衛忠熙らに宛てた書翰で、「唐国争乱」の状況について次のように報じている。

唐国争乱はいよいよ激しさを増している。琉球船が帰帆せず、未だ詳細は判らないが、「琉人手紙」によると、「明之裔孫」で朱氏と称する者がおり、太平軍は名将も多く、奇策を用いて五、六省余を攻め取った。「北京往来第一之要処」たる南京が陥落したため、物資の輸送に支障が生じて米穀が高騰し、餓死者も少なくない。賊軍側は米穀も豊富で安く、「仁政」を施しているので投降する官軍も多い。皇帝は事態を憂慮し、勅諭を次々と発しているようである、と。⁽²¹⁾

こうした琉球ルートの情報以外に、薩摩藩ではオランダ人からも海外情報を収集した。一八五三年一月二日、薩摩藩主の命をうけた「密使」が長崎オランダ商館を訪れ、琉球に集結中のペリー艦隊の動きや中国兵乱について

の情報提供を求めた。⁽²²⁾ 中国兵乱の動きをつかんだ島津斉彬は、その混乱につけこんで中国へ武器売り込みをはかることを画策していた。一方、琉球王府は情勢の把握にとめるべく、那覇に寄港する外国艦船からも積極的に中国事情を聴取し、一八五四年二月には、プチャーチン提督率いるロシア艦隊から中国兵乱やペリー艦隊の動きについての情報を集めた。また、フランス船などからも「魯西亜・土耳其合戦」(クリミア戦争)に関する情報を入手した。これらの海外情報は、薩摩藩に逐一報告された。一八五六年四月には琉球使節が実際に見聞した太平天国の戦乱について詳しい情報が伝わり、その内容を全文十七カ条にまとめた「唐国兵乱一件」と題する報告書が薩藩の国元から江戸家老へ提出されている。⁽²³⁾

3 第二次アヘン戦争の情報

一八五六年から六〇年にかけて、英・仏両国は新たな対中国侵略戦争をしかけた。いわゆる第二次アヘン戦争である。太平天国と列強の侵略という形で「内憂外患」の挟み撃ちにあった清朝の権力基盤は弱体化し、外交的にも求心力を失った。そのことは冊封・朝貢体制の崩壊につながっていく。⁽²⁴⁾

一八六〇(咸豊一〇)年夏、琉球の進貢使向志道らが福州に着いた。しかし、北京への道は太平軍に寸断されていたため、上京は翌年三月まで延期せざるを得なかった。四月一日到北京から届いた諭達は琉球進貢使に帰国を勧めていた。この前代未聞の事態に直面した琉球側は、すみやかに上京したいと何度も要請したが許されず、やむなく琉球に帰ることになった。その後も長引く戦乱の影響で、絹織物・茶・薬種などの輸入貿易が停滞した。

太平天国の乱のために朝貢制度が事実上停止し、深刻な影響を蒙った国は琉球だけでない。越南（ベトナム）にもよく似た現象がみられる。すなわち、一八五二年一〇月に首都フエを出発した朝貢使は三年たつても帰らず、五年末にようやく帰国した。一八五三年から六七年までの間は、朝貢使の派遣そのものが中断される事態となった。北京への朝貢ルートが太平軍に占領されたためである。⁽²⁵⁾

こうした中国情勢は、琉球ルートの情報によって薩摩藩主島津斉彬の耳に入った。斉彬は日本でも同様の事態が起こるのではないかと危機感を抱き、安政五（一八五八）年五月の幕府宛の建言書で、もし欧米諸国が一体となって日本へ押し寄せれば国力は疲弊し、「内乱」の発生も大いに懸念されると述べている。

こうした切迫した危機意識の背景には、外圧と内乱で窮地に追い込まれつつある中国の情勢が念頭にあったことに注目する必要がある。同年五月二十九日、島津斉彬が側近の早川五郎兵衛に送った書翰⁽²⁶⁾によれば、琉球に滞留中のフランス人が語った情報として、「英・仏の両館」が来年中には北京に設けられる形勢であること。さらに朝鮮はイギリスが、日本はアメリカがそれぞれ「引受」ける手筈になっているという。続いて六月五日、島津斉彬から近衛忠熙宛の書翰⁽²⁷⁾に、

（前略）琉人も追々上国仕候、唐国之様子承候処、賊勢盛之上、英仏両夷之和親も不相濟段届申出候、長崎江
 亜船耆艘来着、跡類船二艘待合せ江戸江可参申居候よし、其外魯・英・仏三国之軍艦、追々江戸近海江可参段
 申出候との事ニ御座候、（後略）

とある。この情報によれば、「唐国之様子」は太平軍の「賊勢」が活発で、イギリス・フランスとの「和親」も未だ成立しない状況にあること。さらにロシア・英・仏三国の軍艦がいずれ江戸近海に來航するというのである。

中国では英仏連合軍の天津占領によって第二次アヘン戦争が終結し、一八五八年六月に天津条約が結ばれた。同条約は南京条約に定められた不平等条項をさらに強める内容で、新たに十一の開港場設置、アヘン輸入の合法化、外交官の北京駐留などを規定していた。天津条約の成立直後、第二次アヘン戦争を指揮したイギリスのエルギン卿が二隻の軍艦を率いて江戸湾に姿を現わし、日英修通商条約の調印を幕府に迫った。

島津斉彬の予想どおり、列強の矛先が中国から日本へと方向を転じつつあったその年、琉球の宜野灣親方が「唐之首尾御使者」として薩摩へ赴き、一〇月二六日に家老新納久仰に面会し、中国情勢について報告した。その際、「唐国争乱」などの理由で「冠船」(冊封使)の受け入れを延期したい、という琉球国王の「内意」が伝えられた。⁽²⁸⁾ 混乱の度を深める中国情勢が、琉球外交の根幹をなす冊封関係にも深刻な影響を及ぼし始めたことが注目される。

一八五九年五月イギリス領事オールコックが日本に着任、六月には神奈川・長崎・箱館が開港された。その頃、中国では再び列強による侵略の火の手があがっていた。イギリス公使ブルースは天津条約批准を名目に、自国艦一五隻、フランス艦二隻、アメリカ艦三隻の連合艦隊を率いて天津から北京へいたる白河に進入し、これを阻止せんとする清軍と交戦したのである。この戦闘に関するニュースはすぐに日本へも伝わり、駐日イギリス公使オールコックと幕府老中との会談の席上、「清国兵乱」として報告されている。⁽²⁹⁾

翌一八六〇年七月、英仏両国は二万の遠征軍と二〇〇隻の大艦隊をもって大沽砲台を攻撃し、さらに一〇月北京に攻め入った。北京陥落の直前、咸豊帝は后妃や側近らとともに熱河へ逃げ去った。英仏軍は離宮円明園を焼き払い、金銀財宝を奪い取るなど、暴虐をほしいままにした。こうした戦乱の巷と化した北京の状況について、琉球王府の史書には次のように記されている。⁽³⁰⁾

中国賊兵昌熾、騷擾不堪。況又北京、有英仏我三国夷人、但振威勢、闖入城内、猖獗不堪等由。主上深為軫念、意欲掃盡賊氛、除去夷人、早享太平之福、乃禱告各神。

太平天国の「賊兵」による騷擾に加え、北京に入城した英・仏・我（ロシア）の外国勢力が威勢をふるう状況は、このように琉球までも伝わったのである。

一八六〇年一〇月、北京条約が結ばれた。清朝は天津の開港、賠償金の増額、苦力の国外連れ出し、イギリスへの九竜割譲などを認め、ロシアは黒竜江（アムール河）以北の地とウスリー河以東の広大な領土を獲得した。

翌六一年、咸豊帝は逃避先の熱河で失意のうちに死去、同治帝が即位した。その年、北京に総理衙門が設立され、欧米公使の駐留が始まった。それ以降、華夷秩序と朝貢システムを基軸とした伝統的な冊封体制はしだいに解体化の方向をたどり、東アジア国際関係も新たな転換期を迎えることになる。一八六〇年代の日本では、外圧の危機とともに攘夷意識が高まった。幕臣大久保忠寛などの認識では、イギリスやフランスが対馬・杵岐・佐渡をねらい、アメリカが伊豆大島を、ロシアが蝦夷地を占領するかもしれないと、日本の周縁地域が列強に分割領有されることへの不安を表明していた（『続再夢紀事』）。すでに二年前、ロシア軍艦の対馬占拠事件が起こり、樺太ではロシアとの国境問題が懸案となっていた。従来、幕府は琉球を対外的には「異国」と位置づけ、その領有問題をあいまいにしてきたが、列強の侵犯が懸念されるにつれて領有意識も変化し、琉球を「内国」化する方向に傾いていく。

以上のように、東アジアに進出した西洋列強と対外戦争を経験した中国では、日本より一足早く、「開国」の激動に巻き込まれた。そのなかで変転する中国情勢は同時代の日本にとって大きな関心事であったが、その海外情報は長崎の唐船風説書やオランダ風説書だけに限らず、琉球ルートという情報窓口を通じて日本へ伝わったのである。

注

- (1) ロナルド・トビ（速水融・永積洋子・川勝平太訳）『近世日本の国家形成と外交』（創文社、一九九〇年）。
- (2) 真栄平房昭「近世日本における海外情報と琉球の位置」（『思想』第七九六号、岩波書店、一九九〇年）。
- (3) 藤田寛「海防論と東アジア—対外危機と幕藩制国家—」（青木美智男・河内八郎編『講座日本近世史』⑦ 開国・有斐閣、一九八五年）。
- (4) 『鴉片戦争在閩、台史料選編』（福建人民出版社、一九八二年）三九九頁。
- (5) フランス艦隊の来航とフォルカードについての論文は数多い。近年の研究として、島尻克美「幕末期における琉球王府の異国船対策—仏艦船来琉事件を中心に—」（『地方史研究協議会編『琉球・沖縄—その歴史と日本史像』雄山閣、一九八七年）、生田澄江「幕末におけるフランス艦隊の来航と薩琉関係」（『沖縄文化研究』第一九号、法政大学沖縄文化研究所、一九九二年）、外間政明「弘化期の琉球外艦事件をめぐる薩摩藩の動向について」（『地域と文化』第九四号、ひるぎ社、一九九六年）、中島昭子「フォルカード神父とカトリックの日本再布教」（『岸野久・村井早苗編『キリシタン史の新発見』雄山閣、一九九六年）、小川早百合「一九世紀西歐における琉球情報と宣教師」（前掲書）等を参照。
- (6) 浜下武志『中国近代経済史研究—清末海関財政と開港場市場圏』（汲古書院、一九八九年）、同『近代中国の国際的契機』（東京大学出版会、一九九〇年）、岡本隆司「広東洋行考」（『東洋史研究』第五四卷二号、一九九四年）等の研究を参照。

- (7) 「仏英情状」(『歴代宝案』別集、台湾本第十五冊)。
- (8) 岩下哲典「開国前夜の政局とペリー来航予告情報」(『日蘭学会会誌』第三〇号、一九九二年)、同「ペリー来航予告情報と長崎」(『歴史手帖』第二〇巻四号、一九九二年)、青木美智男「ペリー来航予告をめぐる幕府の対応について」(『日本福祉大学経済論集』第二号、一九九一年)。
- (9) 『ペリー日本遠征日記』(金井圓訳、雄松堂) 一〇八〜一〇九頁。
- (10) 『ペリー日本遠征随日記』(洞富雄訳、雄松堂) 二四・一一〇〜一一一頁。
- (11) 『歴代宝案』第二集、一九四巻九号文書。
- (12) 『琉球王国評定所文書』第八巻、一八二〜一八三頁。
- (13) 『球陽』巻二十二、尚泰王六年条。
- (14) 連立昌『福建秘密社会』福建人民出版社、一九八九年。
- (15) 『島津斉彬文書』下巻一、七三八頁。
- (16) 『島津斉彬文書』下巻一、七二五頁。
- (17) 『琉球王国評定所文書』第九巻、二五一〜二五二・二八五〜二八六頁。
- (18) 『幕末出島未公開文書―ドンケル・クルチウス覚え書』(フォス美弥子編訳、新人物往来社、一九九二年)七八頁。
- (19) 『琉球王国評定所文書』第八巻、一八四頁。
- (20) 『琉球王国評定所文書』第十巻、一九五頁。

- (21) 『島津斉彬文書』下巻一、六〇一～六〇二頁。
- (22) 『幕末出島末公開文書―ドンケル・クルチウス覚え書』七〇～七一頁。
- (23) 真栄平房昭「幕末期の海外情報と琉球―太平天国の乱を中心に―」（地方史研究協議会編『琉球・沖縄―その歴史と日本史像』雄山閣、一九八七年）。
- (24) 冊封体制の崩壊と琉球をめぐる問題について詳しくは、西里喜行「冊封体制崩壊期の諸問題―琉球問題を中心に―」（復帰二〇周年記念沖縄研究国際シンポジウム実行委員会編・刊『沖縄文化の源流を探る―環太平洋地域の沖縄―一九九四年）、真栄平房昭「十九世紀の東アジア国際関係と琉球問題」（『アジアから考える③ 周縁からの歴史』東京大学出版会、一九九四年）等の研究を参照。
- (25) 『大南寔録』第四紀、卷十三。
- (26) 『鹿児島県史料 斉彬公史料』第三卷、一〇三〇頁。
- (27) 近衛家文書（陽明文庫所蔵）、『斉彬公史料』第三卷、一〇三五頁。
- (28) 『鹿児島県史料 新納久仰雑譜二』四四八頁。
- (29) 『大日本古文書 幕末外国関係文書之二十四』二二九九頁。一八五九（安政六）年に来日したジーボルトらは上海に滞在中、太平天国軍の攻撃を身近に見聞した。オランダ領事館では武装警戒し、「大部分の男子は非常事態に備えて夜も眠らずにいた」という（『ジーボルト最後の日本旅行』平凡社東洋文庫、一九八一年、四四頁）。
- (30) 『中山世譜』卷十三。

(史料1)

子八月

琉球館より申出候書付(東京大学総合図書館所蔵)

唐風聞之次第被聞召上候儀有之候間、唐帰帆之者共罷登居候ハ、承届可申上旨被仰渡趣承知仕、此節唐帰帆之者共三四人船方之内ニ而罷登居候付相尋申候処阿蘭陀制阿ひんと申葉、中国相用候儀素より

禁止ニ而候得共、密々相用候者共有之、去々年大禁被申渡違背之者則々相捕牢込為被申付由、右通大禁被申渡、阿蘭陀人共江茂以後右阿ひん不持来様堅被申渡候由。且又阿蘭陀船拾艘餘広東湊外江相集り居る風聞茂有之、如何様之訳ニ而湊外江相集候哉、其子細者相知り不申由候得共、此儀者実事之様漸為有之由御座候。

八月

阿蘭陀製阿ひんと申葉、中国相用候儀素より

禁止候得共、密々相用候者有之、分ヶ而大禁被申渡置

候処阿蘭陀人共右阿ひん持来候付、広東之官人より

右阿ひん大禁ニ付而者向後買取不申候間早々持帰

候様阿蘭陀人江被申渡候処、大禁ニ而買取不申候ハ、

是非持帰可申候間、此中代延ニ而売渡置候阿ひん代

屹与相渡可申、左候ハ、帰国可致段為申出由。

右阿ひん代延ニ而売渡置候代銀及過分急ニ返済

不行届候付、阿蘭陀人共右代銀為催促帰国相滞

候処、官人より者早々致帰国候様度々被申渡候故、

阿蘭陀人共甚立腹仕候。鹿抹之仕形いたし一旦

及騒動為申事候得共、広東之威勢を恐阿蘭陀

人共終ニ逃去候由、

右唐帰帆之役者上着仕候付、唐風聞之次第

相尋候処、唐ニ而商人之儀右之通承候由。然共商人

共ニ茂始終之成行委細之所者承及不申段為申由

御座候事。

子八月

大清国之儀、素より鴉片御大禁之事候処、近年

阿蘭陀人共広東省江多持渡致密商候故、諸省

一統手広相用得候振合ニ而、至去々年者鴉片

商壳嚴重御取締方為被仰付由候処、阿蘭陀人

共ニ者承引無之、終ニ逆心差発去年六月比より

兵乱相起候次第左条ニ申上候。

去年六月初比、阿蘭陀船四五拾艘浙江省之

内定海県与申所江到着、石火矢を以総兵官并

兵役共致殺害、同月末比ニ者同省之内乍浦与申所江

攻寄候処、彼所江茂官兵を起候付、七月中旬比ニ者

引退、於所々茂石火矢鉄砲を打合戦を催候処、

省々之要害敵防方被仰付候付、自由ニ難攻入

江蘇之洋面より或者三・四艘或者五・六艘往還相絶

不申、八月末比ニ者又々同省之内崇明之長安沙与

申所江攻寄致合戦候付、両方共軍民殺害多為

有之事候得共、終ニ阿蘭陀船壹艘奪取候由。

右付阿蘭陀船共彼所より引退、直ニ福建省之内

厦門与申所江攻寄、又々異風鉄砲を打放為相戦由

候処、官軍共心力を尽相戦候付彼所よりも為引退由候。

同十二月中旬比、広東省之内虎門外之沙角大角与

申所江攻寄、其所之砲台相破副将并兵役共致殺害、

当二月初比、右虎門被攻取所之官兵共致殺害

阿蘭陀人鋭気を張、島浦与申所迄為攻寄由候処、

湖南より多勢官軍来着段々及合戦、終ニ阿

蘭陀人共敗走、当分者静ニ為相成由。

広東省并浙江省之儀、右通兵乱ニ付諸民及騒動

海陸之往還差支、諸商人共及迷惑候段右ニ付而者

琉球方御買物茂順々相調候儀無覚束、尤此儀者

大宿役者よりも委細被申上筈候。

右通合戦ニ付而者、於福州茂総督御始諸官人兵役共

相率、各手配を以諸所江御差越敵防方被成候、

殊更三・四千斤掛之石火矢数千丁鑄調、是又

御用心被成事御座候。然者右兵乱之形行区々

風聞有之取究難成候付、衙門より委細聞合申出

候様阿口通事共江申付候処、軍場一件者諸衙門

別而隱密被仰付置事ニ而聞合方容易難成候段

申出候付、大概阿口通事并館屋立入之唐人共より

承候俟申上候間、此旨被仰上可被下候以上。

丑四月 存留 田里親雲上

表方

御取次衆

右之通撰政三司官より琉球館聞役并存留親方江

相付添書を以申出候事。

覚

一 於清国阿蘭陀人鴉片商売被差留候付、逆心差発

為及兵乱由。

一 去年六月初比、阿蘭陀船四五拾艘浙江省之内定海

県与申所江寄来、石火矢を以総兵官を始兵役共致

殺害、同省之内乍浦与申所江攻寄候処、官兵を起

相防候付、七月中旬比者引退於所々石火矢鉄砲を打

合戦を催候得共、省々要害敵敷防方有之候付自由ニ

難攻入、江蘇之洋面より致往来八月末比、又々同省

之内崇明之長安沙与申所江攻寄、致合戦阿蘭陀

船一艘奪取候由。

一 右付阿蘭陀船共引退、直ニ福建之内厦門与申所江

攻寄、又々異風鉄砲を放相戦候処、官軍ニ打負

為引退由。

一 同十二月中旬比、広東省之虎門外之沙角大角与

申所江攻掛其外兵役共致殺害、当二月初比虎門攻取

夫より阿蘭陀人銳気を張、島浦与申所迄攻寄候処、

湖南より官軍多勢寄来段々及合戦候付、終ニ阿蘭

陀人致敗走、当分者静ニ為相成由。

一 広東省浙江省之儀、右兵乱付諸民及騒動海

陸之往還茂差支、諸商人共及迷惑候由。

右之通此節上国人より承申候以上。

丑六月五日

右者渡唐之琉球人江相糺可申出旨琉球館聞役江
相達候処、右之通申出候事。

覚

一 於清国阿蘭陀人鴉片商売被差留候付、逆心

差発為及兵乱由。

一 去年六月初比、阿蘭陀船四五拾艘浙江省之内

定海県与申所江寄来、石火矢を放し攻掛不意之事ニ而

可防様不罷成、県官姚氏者井川ニ身を投げ、総兵

張氏者石火矢ニ当り相果、終ニ定海県被攻取夫より

同省之内乍浦与申所江攻来候得共、要害敵敷防方

有之難攻入、江蘇之洋面より致往来、八月比又々

同省之内崇明之長安沙与申所江攻寄致合戦、此時

大将伊氏計策を以阿蘭陀船壹艘奪取、千餘人

打殺式拾式人者生取候付、最前攻取置候定海之地方

を以生取者ニ替異度旨、阿蘭陀人共願出候付、其通

為相達由。

一 福建之内厦門与申所江阿蘭陀船壹艘乘来候付、

川口関守之者共阿蘭陀人おどし之為玉なしニ而

石火矢鉄砲打掛候処、阿蘭陀人共怒を起石火矢

を打放唐人四拾人餘被射殺追々内江攻入候付、官人

始末々迄逃走、翌日武官軍勢引卒来候処、其以前

阿蘭陀人者引取不罷居由。

附其時阿蘭陀人共、村内ニ放置石火矢玉斤目

五拾斤位、其玉之内ニ壹斤位之小玉式三拾粒

位、塩硝共入付為有之由。

(下略)

〔注記〕翻刻にあたり、文字の改行は原文のママとし、句読点

は適宜付した。

(年表) アヘン戦争前後の国際情勢

1835年	イギリス東インド会社の所属船、琉球・朝鮮に来航し、偵察活動を実施。
1837年	米国船モリソン号、琉球に寄港。琉球の人々、アヘンを非難。
1840年	アヘン戦争情報、福州の琉球館を通じて日本へ伝達。 (史料1)
1841年	イギリス士官 E. ベルチャー香港に上陸。最初の英国旗を掲げ、香港島の領有を宣言。
1843年	イギリス海軍の測量艦サマラング号、琉球来航。石垣島・宮古島および近海を測量した後、香港へ引きあげる。
1844年	イギリス領事 G. T. レイ、アヘン戦争により開港場となった福州に着任。
1845年	イギリス領事 R. オールコック (後の初代駐日公使) 福州着任。サマラング号再来。
1850～60年	中国の内乱激化(太平天国の乱)。香港への流入人口が急増する。
1856年	第二次アヘン戦争勃発 (～60年)。 琉球ルートの情報「唐国兵乱一件」が日本へ伝来。
1857年	長崎において日蘭追加条約調印(8月29日)。同条約第14条にアヘン禁輸規定。
1858年	天津条約締結。アヘン輸入の合法化規定。 同年、エルギン卿率いるイギリス艦隊、江戸湾に来航。
1859年	イギリス領事オールコック日本に着任。神奈川・長崎・箱館の開港。
1862年	長州藩士高杉晋作、薩摩藩士五代友厚ら、上海に渡航。中国半植民地化の実態を見聞し、強い衝撃をうける。帰国後、イギリス公使館等を焼き討ち (攘夷運動の激化)。



